

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
159	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名 (原題/訳)</b>	
Per capita alcohol consumption and suicide rates in the U.S., 1950-2002. 1950-2002 年のアメリカ合衆国における一人当たりのアルコールの消費量と自殺率	
<b>執筆者</b>	
Landberg J.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
Suicide Life Threat Behav. 2009 Aug;39(4):452-9.	
<b>キーワード</b>	
アメリカ、アルコール消費量、自殺率	
<b>要 旨</b>	
<b>目的：</b> 本研究は、第 2 次世界大戦以降のアメリカ合衆国における自殺率が、1 人あたりアルコール消費量の変化によってどのように影響されたかについて、男女別に推定することを目的とした。	
<b>方法：</b> 分析には 1950 年から 2002 年の年間自殺率と 1 人あたりのアルコール消費量(総量と種類別)を用いた。時系列データの分析には、ARIMA(AutoRegressive Integrated Moving Average)モデルと呼ばれている Box-Jenkins 法を用いた。性別のモデルは、総アルコール摂取量とアルコールの種類別の両方を指標として、性年齢別モデル(15-34 歳, 35-54 歳, 55-74 歳, 75 歳以上)では、総アルコール摂取量のみを指標として推定した。	
<b>結果：</b> 性別の時系列モデルによる分析結果は、総アルコール摂取量とアルコールの種類別のどちらも、男性の自殺率と統計上有意ではなかった。女性では、総アルコールの予測値 (0.059) は 10%の危険率で、スピリッツの予測値 (0.152) は 5%の危険率で女性の自殺率と統計上有意だった。性年齢別の分析では、女性では、各年齢別グループ(74 歳以上を除く)で、自殺率と正の関係であったが、統計上有意な推定がみられたのは 55-74 歳だけであった。	
<b>結論：</b> 本研究の結果は、アメリカ合衆国における 1 人あたりアルコール消費量が、女性の自殺率を変化させていることを意味しているが、男性の自殺率は影響されない。	